

東京都健康長寿医療センター

研究所 No.316 2025.1 (冬号) NEWS

東京都健康長寿医療センター研究所

Index

2024年の総括及び新年のご挨拶

・センター長	1
・自然科学系 副所長	2
・社会科学系 副所長	3
認知症未来社会創造センターと研究成果のご紹介	
・はじめに	4
・チャットボットを用いた情緒支援の臨床実証研究	4
・アミロイドPET読影解析支援ツールの開発と実装	6
・AIを用いたMRI神経画像診断について	7
第171回老年学・老年医学公開講座開催レポート	8
やってみよう！QRコードの読み取り方法	8
コールドスプリングハーバー研究所研究会参加レポート	9
視察レポート	
～海外から注目される日本の高齢者医療・介護予防～	10
タイ・マヒドン大学シリラート病院医学部との 学術・教育交流に関する協定締結式を終えて	11
第172回老年学・老年医学公開講座 開催のお知らせ	12
主なマスコミ報道	12
編集後記	12

2024年の総括及び新年のご挨拶

センター長 秋下 雅弘

皆様、新年明けましておめでとうございます。
今年初めての研究所NEWSをお届けするにあたり、
簡単なお紹介とご挨拶をいたします。

東京都健康長寿医療センターは、1872年に渋沢栄一が創設した救貧施設「養育院」を母体に、
150年以上にわたり高齢者の福祉と医療の進歩に
努めてまいりました。現在は老化・老年病の研究
と診療に特化した国内に2施設しかない専門医療・
研究機関として国内外に名声を博しています。

当研究所では、高齢者に多い認知症やフレイル・
サルコペニアなどの老化や老年疾患のメカニ
ズムを解明し、予防・治療に役立てています。また、
都内および国内各所のコホート研究で高齢者の日
常生活や健康に関するさまざまなデータを収集し、

次世代の高齢者医療・介
護に関連する研究も積極
的に進めています。これら
の研究を病院とも連携し
て行っていることも当研
究所の特徴の一つです。

今後も、我々は一丸となって高齢社会の課題を
積極的に拾い上げ、都民の明日をより良くするた
めの解決策を見出す責務を果たすために尽力して
まいります。まずは、昨年の活動と最新の研究成
果をご覧ください。

本年も変わらぬご指導・ご鞭撻のほど、よろし
くお願い申し上げます。



自然科学系 副所長 石神 昭人

新年あけましておめでとうございます。

自然科学系では、第四期中期計画期間（2023～2027年）に高齢者の健康維持や老化、老年病の機序解明、老化を制御する方法論の確立、早期診断法および予防法の開発・実装を目指す基盤的研究を推進しています。二年目となる2024年には、多くの研究成果が得られ、英語論文として発表、そして「脳脊髄液アルツハイマー病バイオマーカーと脳内病理所見の関係（図）」を含めた8件の

プレスリリースを行いました。プレスリリースの詳細は、ホームページをご覧ください。

2025年は、二年間の研究成果を礎にさらに老化、老年病の基盤的研究を発展させるべく取り組む所存です。本年も皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

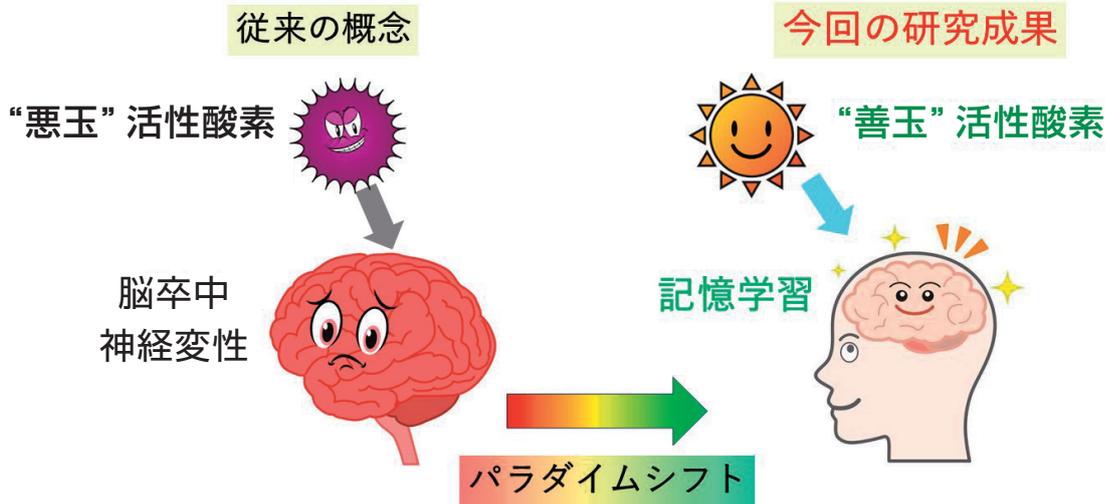


図 活性酸素の機能的役割のパラダイムシフト*
*パラダイムシフトとは、これまでなら当然とされてきた物事の見方や考え方が変化することです。

自然科学系のプレスリリース発表



脳脊髄液アルツハイマー病バイオマーカーと脳内病理所見の関係

悪玉因子、活性酸素が記憶形成に必要なであることを解明—抗酸化物質の過剰摂取に警鐘



加齢マウス臓器では糖鎖合成の材料である糖ヌクレオチドの量が変化することを明らかにした

神経変性疾患の治療標的となる分子をサル PET で画像化—臨床応用に期待—



水素ガスが麻酔による神経細胞死を防ぐメカニズムを解明

運動が、慢性疾患を増悪化する細胞老化を抑制するメカニズムを解明



老化および認知症の発症予防に鍵となる性ホルモンに関連する RNA 顆粒因子の働きを解明

アルツハイマー型認知症を防ぐエストロゲン（女性ホルモン）関連受容体の働きを解明



新年あけましておめでとうございます。

社会科学系では、第四期中期計画期間（2023～2027年）に「高齢者と共に拓く、持続可能な地域共生社会をめざして」のスローガンのもと健康長寿・ウェルビーイングを実現するために、「認知症」、「フレイル」、「社会的孤立・孤独」、「健康格差」の解決に向けて、基礎研究と応用・実践研究を進めています。2024年には、研究所・病院の分野横断的研究である「高齢者の健康づくりに資するスマートウォッチ等 デジタル機器活用事業」

についてアプリ完成に向けて関係団体と連携協定を締結しました。また、多くの研究成果を英語論文として発表し、社会的孤立・社会参加については、「「独り好き」志向性ところの健康—「独りでいることを好む人」でも孤立の悪影響は緩和されない可能性が明らかに—」（図）などのプレスリリースを行いました。



WHO-5得点
(高いほど良い)

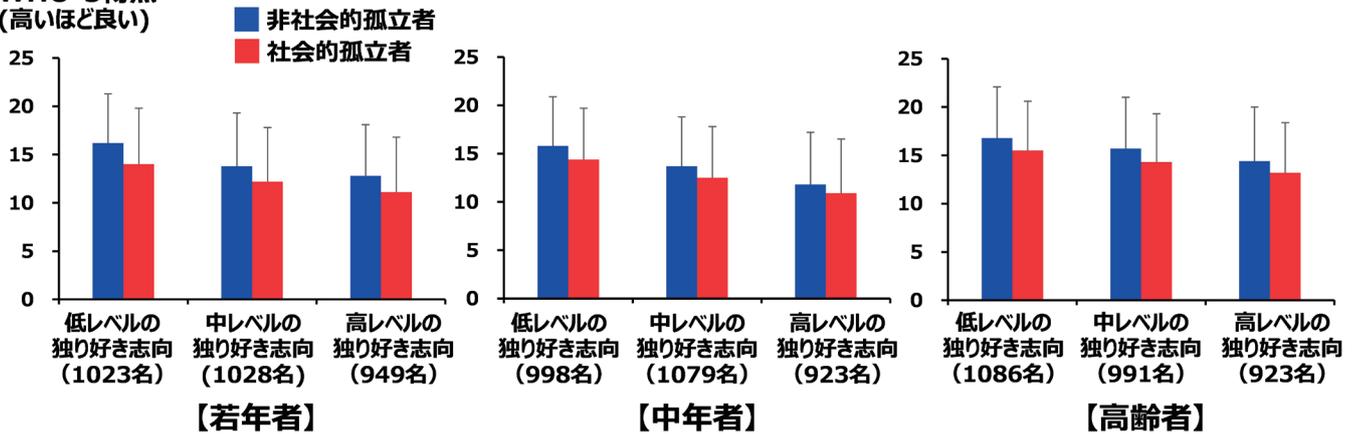


図 独り好き志向と社会的孤立における WHO-5（精神的健康度）得点

栄養関連研究については「日常的なカマンベールチーズの摂取習慣が認知機能の高さと関連することを地域在住高齢女性を対象とした疫学研究により確認」などのプレスリリースを行いました。

2025年は、5つの長期縦断研究：Tokyo-LSAを基に、更に、多くのチーム・テーマの研究を発展させていきたいと考えております。本年も引き続き、ご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

社会科学系のプレスリリース発表



◀ “希薄な社会的つながり”と“独居”は海馬の萎縮に関連するが、その作用は正反対：孤立のパラドックス

社会参加している高齢者は、人生最後まで自立した生活を送る可能性が最大 1.5 倍高い ▶



◀ 「独り好き」志向性ところの健康—「独りでいることを好む人」でも孤立の悪影響は緩和されない可能性が明らかに—



◀ 日常的なカマンベールチーズの摂取習慣が認知機能の高さと関連することを地域在住高齢女性を対象とした疫学研究により確認

血中アルブミン酸化還元バランスが高齢者の低たんぱく質栄養状態の指標となる可能性 ▶



認知症未来社会創造センターと研究成果のご紹介

はじめに

認知症未来社会創造センター センター長 栗田 圭一

東京都健康長寿医療センターでは、2020年に「自治体、医療福祉、産業、アカデミアの有機的な共同作業を持続的に推進し、認知症のリスクを減らし、理解を深め、暮らしやすい街を創り上げる」という大目標を掲げ、病院と研究所が協働を進める5か年プロジェクトとして認知症未来社会創造センターを発足させました。2024年度が本プロジェクトの最終年度となることをふまえ、研究所

NEWSでは本プロジェクトの取り組みを紹介する記事を夏号から連載して参りました。プロジェクト全体の概要やバイオロジー研究部門、バイオマーカー部門については夏号、コホート研究部門と共生部門については秋号をご覧ください。長期間にわたり多大なご支援とご協力を賜り、誠にありがとうございました。



AIを用いたさまざまな新技術の開発

チャットボットを用いた情緒支援の臨床実証研究

理事長

認知症未来社会創造センター AI部門 チャットボット担当 鳥羽 研二

独居高齢者や軽度認知機能障害、フレイルは高齢化の進展に伴い増加の一途をたどっています。さらに、過去3年間のコロナ禍により、フレイルは約5割増加し、認知機能への悪影響も報告されています。当センターで、特にフレイルになりやすかったのは「独居で社会的交流が少ない方」でした。猫を飼っている場合でも、ただ餌をあげるだけではなく、話しかけることで脳がより活性化するという研究結果を踏まえ、当センターでは「心のモーターを起動する一助」となる「対話型情動支援AIチャットボット」の開発を行っています。

本研究開始時には、ChatGPTなどの生成AIは未熟で、流暢な会話に程遠いものでした。そのため、季節、名物、人物、食べ物、趣味、仕事、家族などのシナリオドメインを班員と委託先とで作成しました。70-80歳の方々を念頭に、回想法のテクニックを用いて構成されています。その後生成AIも進歩し、現在では雑談も含めて20分以上の自然な会話が可能となりました。この開発の経緯は読売新聞(2023年4月28日付)にも掲載されました。その一部を抜粋してご紹介します。

「案外、楽しいものだね」

東京都健康長寿医療センターの一室。都内の男性（79）は、同センターが開発を進める「情緒支援型チャットボット」の使い勝手を試し、そう笑顔を見せた。



写真：開発中の「情緒支援型チャットボット」を試した後、感想を話す男性
 出典：2023年4月28日 読売新聞

チャットボットとは、利用者と自動的に会話できるプログラムだ。同センターでは、利用者の年齢や出身地を登録すると、体調のほか、子どもの頃の体験や地域の祭りといった昔話もできるように設計した。

男性はこの日、主治医で同センター理事長の鳥羽研二さんが見守る中、タブレット端末の画面に登場した女性キャラクターとの会話に挑戦。「春ですね。入学式のことを覚えてますか」と聞かれると、「はい。大きな声で返事しましたよ。あの時はね……」と、うれしそうに語り始めた。

その様子に、妻は「家じゃ、こんなにしゃべらないです」と目を見張る。

2024年4月より、国立長寿医療研究センター、杏林大学、当センターコホートにおいて、情緒支援型チャットボットの使いやすさや満足度の調査を実施しています。概ね満足度は高かったものの、慣れや使いやすさには個人差が見られました。今後も機械学習を重ねることで、より自然な会話機能を完成させ、意欲、会話量、外出機会などのフレイルや認知症予防に資する「心のモーターの活性化」となる指標を測定していきたいと考えています。同時に、社会実装に向けて介護施設での検証を進めるとともに、会話システムを搭載する口

ボット、ぬいぐるみ、スマートフォンなどを高齢者の好みやニーズを調べつつ検討して参ります。

共同研究者（姓のみ敬称略）

- 国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター
清家、武田、櫻井、荒井
- 杏林大学
庄司、永井、神崎
- 地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター
吉岡、亀山、笹井

研究所 NEWS のバックナンバーを公開しています

研究所ホームページでは、2001年1月号から現在までの研究所 NEWS を掲載しています。PDF ファイルをダウンロードしてご覧いただけます。是非ご覧ください。



▲QR コード

アミロイド PET 読影解析支援ツールの開発と実装

AI 部門 部門長 PET 担当 石井 賢二

アルツハイマー病で脳に蓄積するアミロイドβ蛋白を取り除き、進行を抑える初めての治療薬レカネマブが2023年に承認されました。2024年には同様の効果を有する2番目の治療薬ドナネマブも承認され、認知症治療は新たな時代を迎えました。脳にアミロイドβの蓄積があるかどうかを確認する方法がアミロイドPETであり、画像を視覚的に読影して蓄積がある（陽性）か、ない（陰性）か、を判定します。この判定は治療薬を使うかどうかの決定的な根拠となる大変重要な診断であり、一定のトレーニングを受け学会の資格を有する専門医が行いますが、読影の手順は複雑で、判定の難しい境界例も存在します。私たちは、関連企業と共同研究を行い、この読影プロセスを効率的に支援するシステム2件を開発しました。

ひとつは株式会社Splinkと共同開発したBrainer Model Aというシステムで、FlutemetamolとFlorbetapirという2種類のアミロイドPET診断薬に対応しています。PET画像の傾きを直し、適切な色調で表示するところを自動的に処理します。MRIがあればPETと正確に重ね合わせた画像も自動的に表示されます。3方向の断面で脳全体を自由に往き来することができ、まさに飛ぶように軽やかに、しかも正確に読影が可能になります。読影しながら速やかにレポートを作成する機能もあります。論理的に矛盾のある入力をチェックし誤記載を防ぐ機能も搭載しました（特許申請）。このような支援システムの導入により、読影時間を短縮し、精度の高い読影が実現できます。アミロイドβの集積量の指標となる数値（SUVrやCentiloid）も計測し提供できます。

既に単体のソフトとして複数の病院に導入されましたが、今後は一般の病院で使われている汎用の画像診断システム（ビューワ）や撮像装置のコンソールに組み込んで更に普及させる計画です。

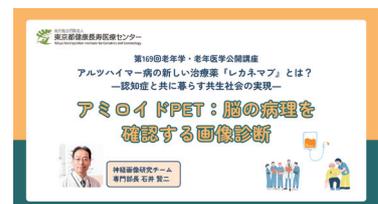
もう一つは、日本メジフィジックス社と共同開発したVIZCalcというソフトで、Flutemetamolに対応しています。脳にどのくらいの量のアミロイドβが蓄積しているかを示す数値を全自動で精度高く計測することができます。様々なレベルの集積の画像でも、適切に処理して正確な計測ができるように共同研究で開発したアルゴリズムを搭載しています。このソフトで計測した数値は、視覚読影をする際に参考にするると診断の精度が高くなるという効用が期待されます。また、アミロイドβを除去する治療薬の効果を判断する際にも参考にすることができます。このソフトも薬事認証を経て、現在国内の100以上のPET施設に導入されています。これに加え、アミロイドβが集積している場所を自動的に検出して表示できるソフトの共同開発に着手したところです。

画期的な治療薬の診療を支えるアミロイドPET診断に役立つシステムをタイムリーに開発し診療の場に提供できたことは大きな喜びです。

YouTube 更新中!

アミロイドPETについてのさらに詳しい解説はこちらの動画をご覧ください。

▼QRコード



▲第169回老年学・老年医学公開講座
「アミロイドPET：脳の病理を確認する画像診断」

AI を用いた MRI 神経画像診断について

AI 部門 AI 診断担当 亀山 征史

認知症未来社会創造センターでは、東京大学工学部・松尾研究室と共同で、AI技術を使ってMRIのT2*（T2スター）画像から微小脳出血を検出する「脳疾患診断システム」の開発を進めています（写真）。このシステムにより、微小脳出血の見落としを防ぎ、認知症の診療の質を高めることが期待されています。

微小脳出血とは、脳内の細い血管が破れた際に生じる微小な出血の痕跡です。この出血はアルツハイマー病などの認知機能障害と関連があるとされており、特に血管にアミロイドが付着すると出血リスクが高まることがわかっています。また、認知症の新しい治療法として承認されたアミロイド抗体治療薬（レカネマブなど）も、血管のアミロイドを取り除く過程で微小出血が発生する副作用が知られています。そのため、アミロイド抗体治療薬の適応判断や副作用のモニタリングには、この診断システムが有用であると思われます。

開発当初は比較的簡単に進むと考えられていたのですが、微小出血だけでなく血管も黒く映り、両者の判別が難しいという課題が浮上しました。また、AI学習用データの準備として、医師が微小出血を特定してアノテーション（データに注釈をつける作業）する必要があり、診療の合間にその作業を行うことが大変でした。最終的には、業者がマニュアルに基づいてアノテーションを行い、医師がチェックする体制に整えることで解決しました。

現在、このシステムを医療機器として実用化するため、PMDA（医薬品医療機器総合機構）との事前相談の準備を進めています。

また、白質病変の分類プログラムの開発も進めています。正確に白質病変の状態を分類できると、認知症リスクの早期発見と予防に役立ちます。白質は脳の中で情報を伝達する重要な部分ですが、虚血によりダメージを受けることがあります。虚血が深刻になると脳血管性認知症のリスクも高まるため、この白質病変を「Fazekas（ファゼカス）分類」で評価することが役立ちます。「Fazekas分類」は白質病変を4段階に分けて評価するもので、白質病変なし（Grade 0）、軽度（Grade 1）、中等度（Grade 2）、重度（Grade 3）と分けられます。分類プログラムではGrade 1から3まで学習させたところ、Grade 1と3の判別は良好でしたが、Grade 2は分類が難しく、AIの誤判定の多くがここに集中していました。人間でも判断が難しいケースが多く、これが誤分類の原因の一つと考えられます。このシステムの開発は今後の課題となります。

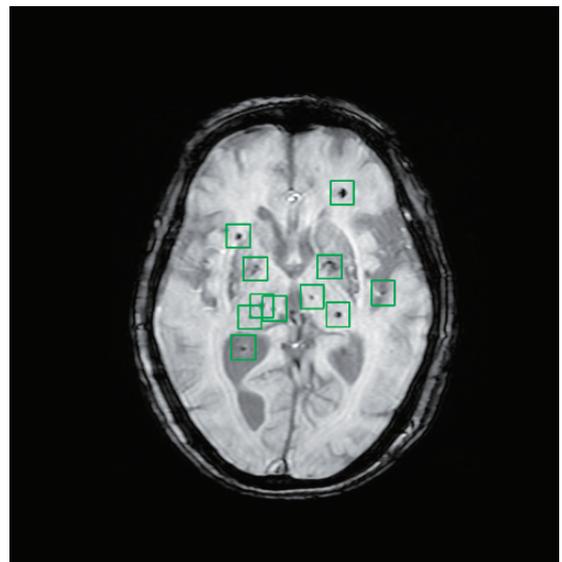


写真 「脳疾患診断システム」で検出された微小脳出血が□で囲われている

第171回老年学・老年医学公開講座開催レポート

総務課 総務係 奥田 鮎美

11月22日（金）、北区北とぴあさくらホールで「社会的孤立と孤独 何が問題？ どう防ぐ？」をテーマに第171回 老年学・老年医学公開講座が開催されました。4人の講師から、令和6年4月に施行された孤独・孤立対策推進法をもとに孤立・孤独に関する疑問への回答、現代の孤独の実態について渋沢栄一の理念である“忠恕の精神”を切り口とした分析、身近な居場所、多様な人たちとの繋がりの重要性と地域での健康づくりに向けた取



左から：小林研究部長、村山陽研究員、倉岡正高研究員、河合恒専門副部長

組の紹介、コロナ禍で急速に広がったスマートフォンを利用した非対面交流やフレイル予防について、講演が行われました。

家族以外の人との交流が減少している時代において、孤立と孤独に向き合うためのヒントを得るきっかけとなりました。会場では熱心にメモを取る姿や参加者同士の活発な交流が見られ、公開講座を積極的に活用いただいている様子が印象的でした。

当日の講演動画は1月中に当センター公式YouTubeチャンネルにて公開いたします。ぜひご覧ください。

やってみよう！QRコードの読み取り方法

QRコードは、小さな白と黒の四角い模様がたくさん集まった「情報のシール」のようなものです。スマートフォンで読み取ると、YouTubeの動画、病院の診療情報、イベントのご案内など、一瞬で必要な情報を見ることができるので、とても便利です。ぜひご活用ください。

01 カメラの画像（アプリ）を押す

携帯電話の中にあるカメラの画像（アプリ）を指で押します。

※カメラのアプリは機種によって異なります。



02 携帯電話のレンズをQRコードにかざして読み取る

右のQRコードにかざしてみましょ。 ※QRコードが画面に一つだけ映るようになると認識しやすいです。



03 通知を指で押す

QRコードを読み取ると右のような通知が表示されます。表示されたら指で押します。



04 情報が表示される

ホームページやYouTubeなど、あらゆる情報を閲覧できます。



コールドスプリングハーバー研究所研究会参加レポート

老化脳神経科学研究チーム 研究部長 柿澤 昌

米国コールドスプリングハーバー研究所で9月10日～14日に開催された「神経結合の分子機構」の研究会に参加しました。この研究所はニューヨーク郊外の風光明媚な地にあり（写真1）、ワトソン・クリックによる遺伝子の二重らせん構造の研究など著名な研究成果を輩出してきた、大変、由緒ある研究所です（写真2）。



写真1 研究所敷地内の風景

この研究会の大きな特徴は、朝、敷地内の宿泊施設（写真3）のドアを出た時から、夜遅く、自分の部屋に戻るまでの時間が、そのまま研究会であることです。講演・ポスター発表のプログラム中は勿論、朝・昼・夕食中も、同じテーブルを囲む数名同士で、研究に関わる話題に花が咲きます。



写真3 敷地内の宿泊施設



写真2 DNA二重らせんのモニュメントと筆者

もう一つ、議論を始めるにあたっての敷居が非常に低いことも挙げられます。今回、参加者の多くは私にとって初対面でしたが、自己紹介もそこに、いきなりサイエンスの本題に入るこの風習は、日本の学会にはなかなかないものです。私自身のレドックスシグナルのシナプス可塑性への関与に関する研究発表（6月4日付 研究トピックス参照）についても、多くの参考となる意見・コメントをいただきましたが、他にも研究を支える文化の違いなど多くの貴重な体験が得られた、有意義な5日間の滞在でした。

研究トピックス



当研究所の研究成果や活動をわかりやすく解説する「研究トピックス」を更新しております。QRコードからご確認ください。

◀令和6年6月4日付
柿澤昌の研究トピックスはこちら

視察レポート

～海外から注目される日本の高齢者医療・介護予防～

健康長寿医療研修センター 副センター長 進藤 由美

わが国は世界で最も高い高齢化率を誇ることから、高齢者医療や介護・フレイル予防、認知症の共生社会の構築など、様々な分野において世界の国々から注目が集まっています。

今年度だけでも、11月11日現在、海外から15件の視察依頼が届いており、直近では9/24（火）にタイの技術振興協会（写真1）、9/27（金）に

タイのバンパオ総合病院（写真2）、さらに10/25（金）にはベトナムのダナン市職員（写真3）の皆様が来訪され、介護予防の取組や地域包括ケアシステム等について学びを深めていただきました。また、11月には中国、韓国から、12月には中国から視察団が当センターを訪問しました。



写真1 タイ 技術振興協会の皆様



写真2 タイ バンパオ総合病院の皆様

アジア諸国は今後急速に高齢化が進んでいきます。言葉はもちろん、社会保障制度や医療保険等の仕組みが国によって異なりますが、当センターの取組や研究成果を参考に、それぞれの国の医療や介護、福祉が発展していくことを祈っています。



写真3 ベトナムのダナン市職員の皆様

タイ・マヒドン大学シリラート病院医学部との 学術・教育交流に関する協定締結式を終えて

健康長寿イノベーションセンター 研究支援ユニット ユニット長 佐野 健二
課長代理 福島 成人

2024年10月8日、当センターとマヒドン大学シリラート病院医学部との間で、学術・教育交流に関する協定の締結式が行われました（写真1）。



写真1 締結式の様子

マヒドン大学は1943年にタイで初めて医科大学として設立された国立大学で、シリラート病院は1888年に開設された許可病床数3,000床のタイ国内最大最古の病院です。当センターからは鳥羽理事長、秋下センター長、荒木フレイル予防センター長、事務局の佐野、福島の名が参加しました。

この時期、タイ（バンコク）はまだ雨期とのものでしたが、幸い雨に降られることもなく、日本車とバイクとトゥクトゥクで渋滞した大通りを進み、マヒドン大学を訪問しました（写真2）。



写真2 タイ（バンコク）の街並み

締結式の午前中、シリラート病院医学部の一部であるピヤマハラジカルン病院にて、病院の歴史

や施設、タイの伝統医学についての説明を受けました。タイの伝統医学では「人間の体は土、水、風、火の4つの要素から成り立っている」とされ、これらの要素の乱れが体調不良を引き起こすと考えられています。伝統医学センターで施術体験をしたタイ式マッサージを通じ、タイの伝統医学に対する理解を深めました（写真3）。

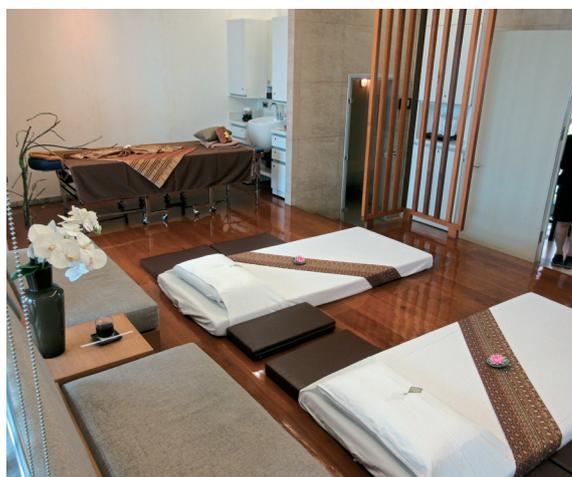


写真3 伝統医学センターでのタイ式マッサージ

午後に行われた締結式では、協定締結の他、研究者の相互交流、共同研究、講演会、研究ワークショップ、シンポジウムの支援、そして今後の具体的なコラボレーションについて有意義なディスカッションが行われ、最後に写真撮影を行い、無事に締結式を終えました（写真4）。



写真4 最後に写真撮影

この協定締結を契機として、二国間の交流を深め国際共同研究をさらに活性化させ、グローバルな連携の強化を支援していきたいと考えています。

第172回老年学・老年医学公開講座

健康寿命を延ばすための生活習慣病管理

～不確実な情報に惑わされないために～

申込不要・入場無料

定員 1,200人

☎手話通訳あり

今回は、健康寿命を延ばすための生活習慣病管理について、高血圧、コレステロール管理、糖尿病、食生活の4つの観点から、4人の専門家がお話しします。皆様のご参加をお待ちしております。

講演 1 13:30～13:55 『高血圧の診断基準がゆるくなった？』
『いいえ高血圧の診断基準は変わっていません』
東京都健康長寿医療センター 副院長 原田 和昌

講演 2 13:55～14:20 『冠動脈疾患患者のコレステロール管理』
東京都健康長寿医療センター 循環器内科専門部長・心臓カテーテル室長 碓井 伸一

講演 3 14:30～14:55 『高齢者における糖尿病管理』
東京都健康長寿医療センター 糖尿病・代謝・内分泌内科医長 豊島 聖志

講演 4 14:55～15:20 『一生活習慣病予防のための食事—
「この機会に食生活を見直しましょう」』
順天堂大学医学部附属浦安病院 栄養科 高橋 徳江

質疑 15:30～16:00 応答 司会 東京都健康長寿医療センター 副院長 原田 和昌

令和7年 1月24日(金)

会場 板橋区立文化会館
大ホール

東京都板橋区大山東町 51-1

13:15～16:00 (開場12:45)

地方独立行政法人
東京都健康長寿医療センター

総務係広報担当
03-3964-1141 (内線1240)
ホームページ <https://www.tmghig.jp/>
定員に達した場合はご入場いただくことができませんので、ご了承ください。



主なマスコミ報道

2024.9～2024.10

老化制御研究チーム 研究副部長 大澤 郁朗

●水素医療の最新研究について
(NHK WORLD JAPAN 「Medical Frontiers」 2024.9.30)

老化制御研究チーム 研究副部長 杉本 昌隆

●運動が、慢性疾患を増悪化する細胞老化を抑制するメカニズムを解明
(読売新聞「読売新聞」 2024.10.19)

社会参加とヘルシーエイジング研究チーム 研究副部長 村山 洋史

●ゲームに関連する「認知症改善」や「脳機能向上」に関して
(NHK 総合「所さん！事件ですよ」 2024.9.28)

社会参加とヘルシーエイジング研究チーム

研究員 竹内 真純

●エージズム どう乗り越える？
(毎日新聞「毎日新聞」 2024.9.9)

自立促進と精神保健研究チーム 研究員 本川 佳子

●お口と身体の健康を保つ秘訣
(花王健康科学研究会「Kaoヘルスケアサポート」
2024.9.5)

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 増井 幸恵

●SONIC 研究について
(NHK 総合「おはよう日本」 2024.9.14)



先日、ご近所さんからレカネマブについて質問を受けました。センターのYouTubeチャンネルで公開している老年学・老年医学公開講座を紹介したところ、「スマホは持ってるけど、一人で目的のページにたどり着くのは難しい」とおっしゃられたのです。この出来事がきっかけとなり、より親切でわかりやすい紙面になるよう、今号の研究所ニュースでQRコードの読み取り方法を紹介することになりました。「紙かネットか論争」は何年も続いてきたテーマですが、是非記事をご覧ください、皆さん自身で紙の良いところ、ネットの良いところを探してみてください。今年も皆さまにとって幸多き一年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。(ムツウ)



2025年1月号発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所編集委員会

〒173-0015 板橋区栄町 35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷 無断複写・転載を禁ずる



X (旧Twitter) : <https://x.com/tmghig>



研究所ホームページ : <https://www.tmghig.jp/research/>



YouTube : <https://www.youtube.com/@tmigtube>